

## 高校と大学教育— 調査から見えるもの

2012年8月10日

中教審高等学校教育部会

金子元久（筑波大学）

### 序— もとになった調査

1. 高校生の生活と学習時間
2. 高校から大学への接続
3. 卒業生の望む高校教育のありかた

### 含意

### 序— もとになった調査

データ①： 『高校生追跡調査』。2005年11月に第一次調査。全国で4,000人の高校3年生とその保護者を地域別にサンプリング。その後、第一次調査の対象者を1~2年ごとに追跡調査。現在まで6回行った。対象は現在、大卒1年後。残存サンプル数1657人。

データ②： 『全国大学生調査』。2006年から2007年に、全国127大学（288学部）に調査を依頼。回答者数計48,233人。

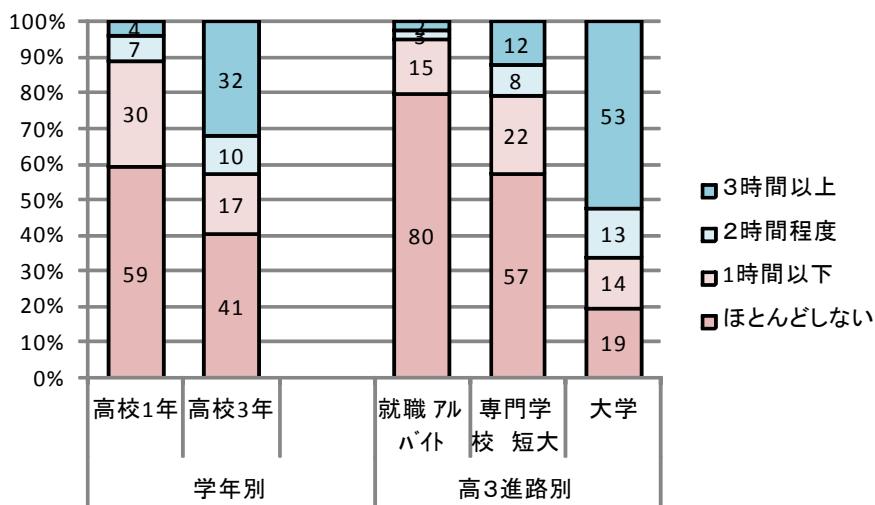
いずれも科学研究費補助金・学術創成研究費『高等教育グランドデザイン策定のための基礎的調査分析』（2005～2009、研究代表者 金子元久）の資金によって実施した。調査概要、質問票および単純集計表は、ウェブサイト <http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/> で閲覧可能。

# 1. 高校生の生活と学習時間

## 授業外学習時間の不足

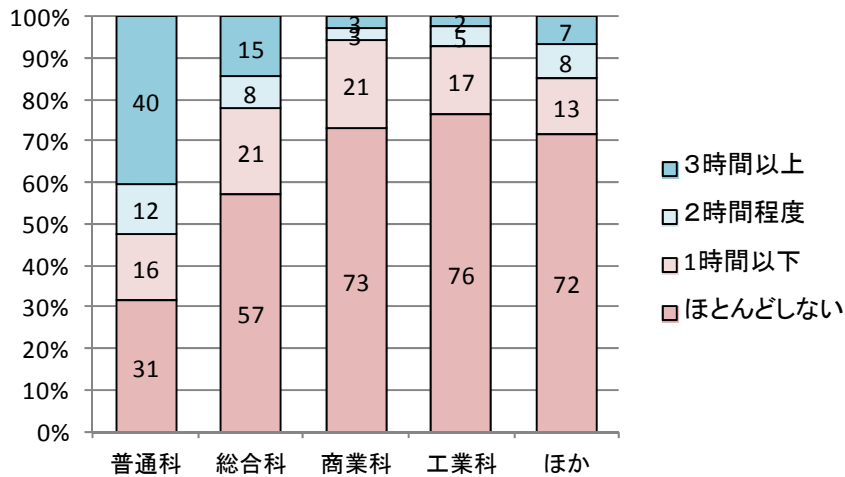
- 高校1年では、生徒の6割が授業出席のほかはほとんど学習していない。1時間以下を入れると9割。3年になると全く学習しない生徒は4割に減るが、1時間程度を入れれば5割。高校生の半分は、高校生活を通じてほとんど授業以外では学習していない。
- 高校3年では進路別に差がでる。就職者では8割が全く勉強していない。大学進学者でも1時間以下が3分の1。

図表1. 高校生の授業外学習時間 — 学年別、進路別



出所：高校生追跡調査、N = 3 997

図表2. 授業外学習時間（高校3年） — 課程別



出所：前表と同じ

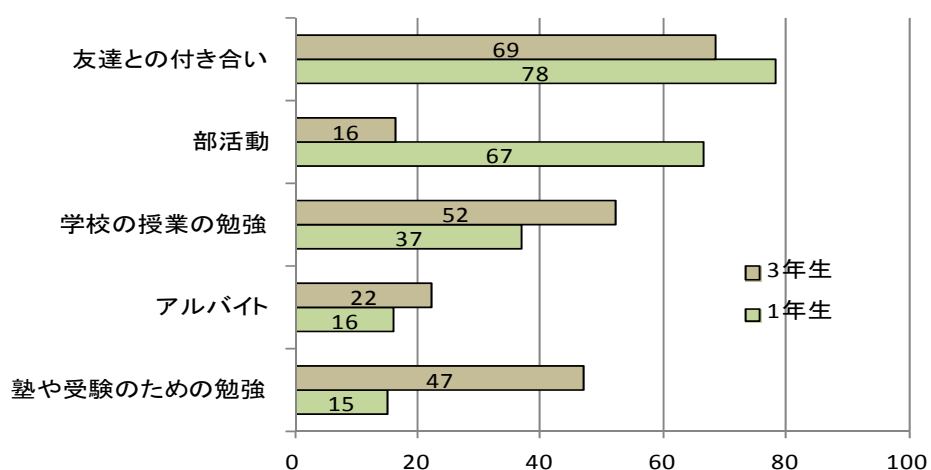
## 課程別の相違

- 高校3年段階で課程別にみると、普通科でも3割は全く勉強しておらず、1時間以下をいれれば半分。
- 職業科では8割が全く家庭では学習しておらず、1時間以下を含めると、9割。職業資格関連等の検定等が、学習の目標になっているようにはみえない。

## では高校生は何をしているか

- 「友達との付き合い」に使う時間が最も多い。〈とても多くの時間を使った〉、あるいは〈多くの時間をつかった〉が一年生では8割、3年生でも7割に達する。
- 部活は1年生では多くの生徒が時間を使っているが、3年生では激減。アルバイトはあまり多くない。
- 三年では授業あるいは、受験勉強に多くを使った生徒が5割程度となる。半分くらいの生徒については部活が減った部分が勉強にまわっている。しかし、むしろ活動時間自体が減ってしまっている生徒も多い。

図表3. 〈とても多くの時間を使った〉および〈多くの時間をつかった〉の合計 (%)



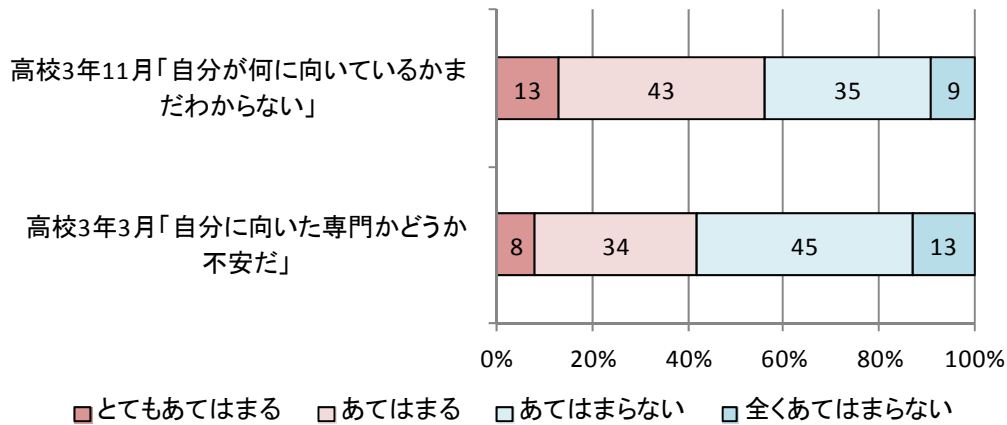
出所：高校生追跡調査、N=4000

## 2. 高校から大学への接続

### 進学選択と自己認識

- 大学に進学したものの、11月の段階でも、「自分が何に向いているかがわからない」と感じていた。
- 大学入学直前の3月の段階でも、4割は進学先の専門に自分が適性があるか不安をもっている・

図表4. 高校3年生の将来、進学先に対する確信度（大学進学者のみ）



出所：高校生追跡調査。高校3年時点で現役大学合格者および進学浪人決定者、

### 進学選択での確信のなさは、入学後にも影響

- 大学入学直前に「自分に向いた専門かどうか不安だ」に、「とてもあてはまる」あるいは「あてはまる」と答えた学生が、その後、大学の在学中に、ほかの学生にくらべてどのような相違を示していたかを、統計的に確認した（図表5）。
- 入学時に選択した専門分野に確信をもっていなかった学生は、大学入学後、1年目で「やりたいことがみつからない」が顕著に多く、2学年でもこれが続く。また「やりたいことが変わってきた」が2学年で多く、4年でさらに増える。また大学4年で「将来が固まってきた」が少なく、「自主的に学ぶようになった」と答える場合も低い

図表5. 入学学科への適合不安と入学後の態度

	1年	2年	4年
やりたいことがみつからない	24.6	26.5	NA
やりたいことが変わってきた	NA	9.8	14.0
将来がかたまってきた	NA	-20.6	-14.7
自主的に学ぶようになった	NA	NA	-10.7

凡例： NAは質問票に該当項目がないことを示す。数字は有意水準99パーセント以上のみ。

注： 大学入学の直前に「専門分野が自分にむいているか不安だ」への回答の、各変数に対する影響の単回帰分析の標準化係数（ $\beta$ ）をパーセント表示。N=981（大学1年次）、989（2年次）、760（4年次）。

出所：高校生追跡調査

## 高校時代に学習時間が少ないと、長期的に影響が残る

- 高校3年の時に学習時間が1時間以下の学生を、他の学生と比べると、統計的に有意な差が残る。
- 卒業後の希望、授業との関わりが低い。とくに、大学卒業後の展望については、他の学生が4年生になるとある程度高くなるのと比べて、そうした回復が少ない。
- 授業関連学習については、他の学生より少なく、差が大きくなる。
- 生活に消極的な傾向が残る。

図表6. 高校3年時の授業外学習時間1時間以下の大学入学後に与える影響

		学年			
		1	2	3	4
授業の位置づけ	大学卒業後にやりたいこと決まっている	-5.5	-5.8	-6.9	-8.5
	授業はやりたいことにかかわる	-4.9	-7.3	-7.8	-6.5
	授業をつうじてやりたいことをみつける	-3.6	-5.5	-2.3	
生活時間	授業出席	-11.1	-9.7	-4.8	
	授業関連学習	-2.4	-4.2	-6.4	
生活感情	やりたいことがみつからない	4.9	3.9	4.9	5.7
	授業に興味がない	4.9	3.9	4.9	

凡例：有意水準99パーセント以上のみ表示

注：高校3年での授業外(家庭、図書館等)での学習時間が、1時間以下を表すダミー変数を独立変数として、各変数に対する単回帰分析の標準化係数(β)をパーセント表示。

N=10,388(大学1年次)、9200(大学2年次)、10261(大学3年次)、101220(大学4年時)。選抜性別は1-3学年のみ。N=8520(低)、11999(中)、124711(高)。

出所：『全国大学生調査』から算出

- 大学4年11月の時点での就職決定率が低く、また就職先に対する満足度が低い。大学時代の自分の成長を振り返っても、評価が低い。

図表7. 高校3年時の授業外学習時間1時間以下の大学卒業後進路、卒業後に与える影響

		大学4年	卒業後1年
進路	進路確定	-9.2	NA
	就職予定先の満足度	-9.0	NA
大学経験の評価	考えた方向に進んできた	NA	-10.5
	人間的に成長した	NA	-10.5
	得たものは大きかった	NA	-6.5

凡例：NAは質問票に該当項目がないことを示す。数字は有意水準90パーセント以上のみ。

注：高校3年での授業外(家庭、図書館等)での学習時間が、1時間以下の場合の、各変数に対する影響の単回帰分析の標準化係数(β)をパーセント表示。N=1,295(大学1年次)、868(大学2年次)、804(大学4年次)、740(大学卒業後1年)。大卒後1年は、現役進学で、4年間で卒業したもののみ。

出所：『高校生追跡調査』から算出

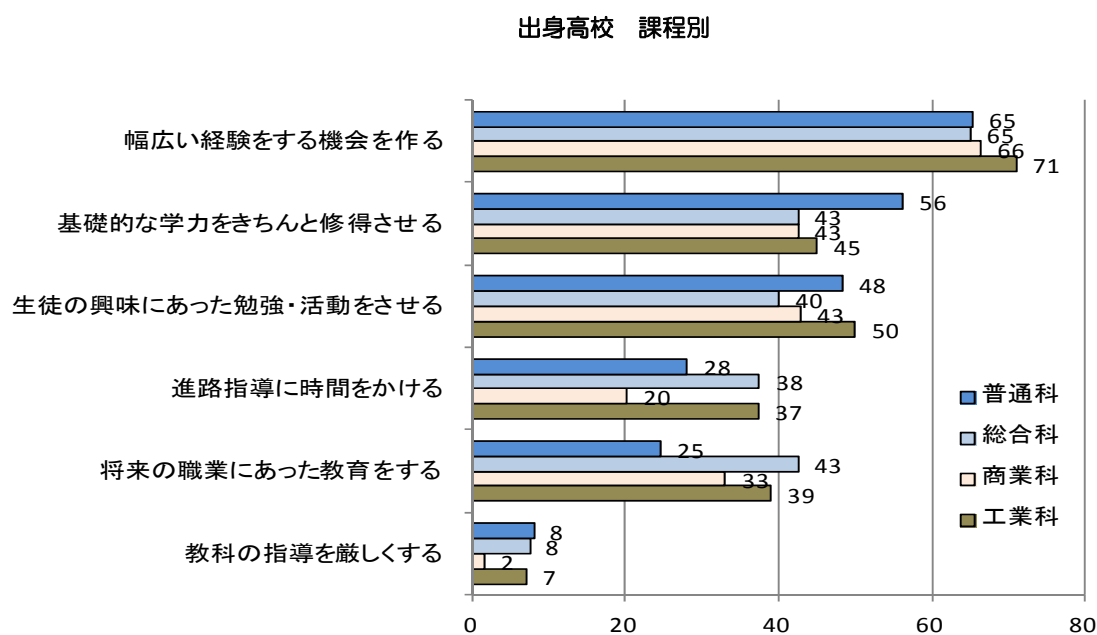
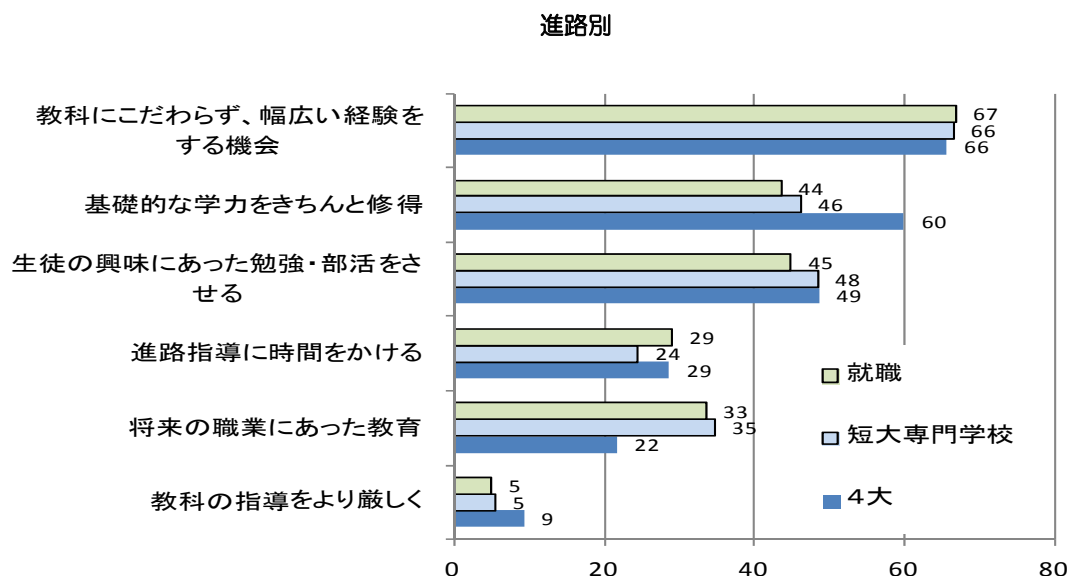
### 3. 卒業生の望む高校教育

高校卒業後5年（大卒1年目）に、振り返って高校教育のあり方を聞いた。

#### 広い経験、基礎的な学力 を重視

- 「教科にこだわらず、幅広い経験をする機会」は7割近くが望む。「基礎的な学力をきちんと修得」が5割。
- 「生徒の興味にあった勉強、部活をさせる」が5割弱。逆に「教科の指導をより厳しく」は支持がほとんどない。
- 「経験」、「修得」、「興味」がキーワード。一般に、現在の「教科」について批判的。

図表8. 高卒5年目での、高校教育の在り方への意見 (%)



出所：高校生追跡調査、N = 1 5 9 7

## 進路別の差

- 進路別にみても、以上の傾向はほとんどかわらない。
- 「基礎的な学力をきちんと修得」は、4年制大学進学者に多く、6割に達するが、就職者でも4割以上が支持している。
- 「将来の職業にあった教育」は、就職、短大専門学校進学者で支持が高く、3割程度になる。しかしそれでも「基礎的な学力をきちんと修得」より低い。

## 出身課程による差

- 出身課程による差も小さい。
- 「基礎的な学力」は普通科で支持が高い（6割弱）が、職業科でも支持は高い。
- 総合科で、進路指導、将来の職業にあった教育についての要求が、職業科より強く、独特の問題を示している。

## 感想

1. 現代の高校教育は、高校生のもつ潜在力を必ずしも十分に引き出していない。授業と関連した学習を、教室以外での自律的学習に発展させる力が弱く、かなりの生徒は人間関係に生活の目標を求めている。極言すれば、高校の半分程度は、授業出席および部活などで生徒をつなぎとめておき、あとの半分の高校では、高学年で受験準備という形で、授業外での学習を行わせている、ともいえる。高校卒業生の半分が、授業出席以外に、自律的な学習をほとんど経験しないままに卒業している点は、将来の職業・社会生活を考えるときわめて深刻な問題である。

2. 大学との接続についても、実質的な非連続性が大きい。「キャリア教育」の必要性が叫ばれているが、授業がほとんど教科を中心として組織されていれば、職業的な展望を育てることは難しい。また大学の側が、そうした高校生の実情を顧みずに、過度の専門選択を強いていることが、結果として大学にとっても、十分な学習の意欲をもたない学生をふやす一つの原因となっている。学習習慣が形成されていない場合も、大学での学習に重要な阻害要因となっている。

3. 現在の形での教科に編成された教育に、進路あるいは出身課程を問わず、若い卒業生が魅力を感じていない点は重要である。これに対して「基礎的な学力をきちんと修得」することに対する要求が大学進学者だけでなく、就職者を含めて強いことが注目される。「幅広い経験」もこうした点から解釈する必要がある。またこれは、生徒、学生の生活や意見の実態を把握することが、高校側が考えているより以上に、高校教育の在り方に重要な示唆を与えることを示している。

4. 以上は高校関係者の努力不足というよりは、社会の構造的な転換に高校教育の、理念・目的・方法が対応しておらず、根本的な再検討が必要とされていることを示している。これは完成教育としての高校教育についても重要だが、大学教育にとっても、きわめて重要な問題となりつつある。